

座長：安藤 真帆（刈谷豊田総合病院）

26. 血液培養から *Ignatzschineria indica* が分離された一例

平林 留名 JA 愛知厚生連 安城更生病院

27. 演題取り下げ

血液培養から *Ignatzschineria indica* が分離された一例

◎平林 留名¹⁾、鈴木 美穂¹⁾、杉浦 康行¹⁾、野村 杏奈¹⁾、稲垣 幹人¹⁾、深津 裕雅¹⁾、中西 幸音¹⁾、舟橋 恵二¹⁾
安城更生病院¹⁾

【緒言】

Ignatzschineria 属は好気性のグラム陰性桿菌で、ハエの腸管内常在菌とされている。劣悪な環境下で生活をしている人に血流感染症を起こすことがあり、皮膚蠅蛆症に関連した多菌性の敗血症となる症例報告が散見されるが類例に乏しい。今回、血液培養から *Ignatzschineria indica* が分離された一例を経験したので報告する。

【症例】

80代女性。不衛生な環境下で生活しており、右乳癌腫瘍の自壊部より出血を認め、当院救急外来を受診した。自壊部は強い悪臭を伴い50~60匹の蛆が観察された。体温37.6℃、WBC 4,900/μL、CRP 0.89 mg/dLであり著明な炎症反応は認めなかった。癌性胸膜炎疑いとして、血液培養2セット採取後、自壊部の洗浄および止血を行い帰宅となった。

【微生物学的検査】

血液培養2セットが培養2日目に陽性となった。血液培養ボトル内容液のグラム染色にて、菌体の一部に球状化を伴うフィラメント様のグラム陰性桿菌が観察された。ヒツジ

血液寒天培地、マッコンキー寒天培地を使用し、35℃炭酸ガス条件で分離培養を実施したところ、24時間でヒツジ血液寒天培地上では灰白色コロニー、マッコンキー寒天培地上では微小な培地色コロニーが観察された。MALDI Biotyper(ブルカージャパン)にて、スコア値2.52で *I. indica* と同定された。カルテ情報より蛆が定着した自壊部が感染巣と推察し、本菌がハエの腸管内常在菌であるという情報も併せて臨床へ報告を行った。

【結語】

Ignatzschineria 属が検出された際には蛆による感染症を考慮する必要がある。また本症例のように臨床分離例が稀な菌種が同定された場合、患者の病態を加味した菌種情報を感染症内科及びASTで共有することで、より円滑な感染症診療、Diagnostic Stewardshipの実践に繋がる。
連絡先 0566-75-2111(内線 2451)